

古来より日本人は日常一ケにおける穢れ一ケガレを祓うため、非日常一ハレを形成し、日常の浄化を行ってきました。ここでは人々の献花に着目します。町の道一ケにおいて事故/事件一ケガレが発生したとき、人々は献花することで、弔いの場一ハレを形成します。この献花という“行為”ではなく、穢れを祓う一連の“所作”を「日浄化」と名づけます。

現代における献花には、故人を弔う他に [事故/事件の再発防止のサイン] という目的と [様々な要因による破損による周辺地域への迷惑] という課題があります。そこで、人々の「日浄化」の器であり、上記の2つを解決する鎮魂家を提案します。

有限であるパビリオンは、人々のごく小さな所作を許容し、弔いの新たな解釈が生まれることが予想できます。



# 崩れゆく鎮魂家と共に

日浄化建築による弔いの新たな解釈

